

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	小林秀雄「私小説論」と『オーベルマン』をめぐって
Author(s)	萩原, 直幸
Citation	フランス文学, 32 : 1 - 12
Issue Date	2019-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048125
Right	
Relation	



小林秀雄「私小説論」と『オーベルマン』をめぐって¹⁾

萩原 直幸

はじめに

帝大仏文科の学生・小林秀雄が神田の本屋で *Une saison en enfer* と運命的な出会いを果たしたという伝説²⁾、そのとりことなってランボーに関する卒論を書き、その詩集を『地獄の季節』と題して訳出したことはあまりに有名な話である。また、その後、小林が文芸批評家となり、かつて専攻したフランス文学も参照しつつ時評活動をするかたわら、ヴァレリー、ジッド、アラン、サント＝ブーヴ等の翻訳を続けたこともよく知られている³⁾。しかし、小林がセナンクールや『オーベルマン』について言及していることは注目されていない。小林がこのマイナーな文学者とその代表作に言及しているのは「私小説論」においてである。

僕がこゝで言ひたいのは、このルッソの氣違ひ染みた言葉にこそ、近代小説に於いて、はじめて私小説なるものの生れた所以のものがあるといふ事であつて、第一流の私小説「ウェルテル」も「オオベルマン」も「アドルフ」も「懺悔録」冒頭の叫喚無くしては生れなかつたのである⁴⁾。

「私小説論」はルソー『告白』第1巻冒頭のやや長い引用から始まるのだが、その引用を受けて、「オオベルマン」等への言及が続くのである。小林の評価によると、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』も、セナンクールの『オーベルマン』も、コンスタンの『アドルフ』も、「第一流の私小説」であって、それはルソーの『告白』なくしては生まれなかったという。『ウェルテル』についてアナクロニズムが生じている⁵⁾のはさておき、ここで小林が「私小説」というタームを使用しているのは、ドイツ語で *Ich Roman*、フランス語で *roman personnel* と呼ばれるものの小林流の訳と思われる⁶⁾。彼はこの西洋の「私小説」の特徴を作者の自然や社会との対決と見ている。

ルッソオは「懺悔録」でたゞ己れの實生活を描かうと思つたのでもなければ、ましてこ

¹⁾ 本稿は2017年12月9日、徳島大学において開催された日本フランス語フランス文学会中国・四国支部大会で行った口頭発表をもとに大幅に加筆・修正を加えたものである。

²⁾ 小林秀雄「ランボオ III」『小林秀雄全集 第二巻』(新潮社、1968)、p.152。

³⁾ ヴァレリー『テスト氏』(1934)、ジッド『パリュウド』(1934)、アラン『精神と情熱とに関する八十一章』(1936)、サント＝ブーヴ『我が毒』(1939)。

⁴⁾ 小林秀雄「私小説論」『小林秀雄全集 第三巻』(新潮社、1968)、p.120。

⁵⁾ 『若きウェルテルの悩み』(1774)、『告白』(1782, 89)、『オーベルマン』(1804)、『アドルフ』(1816)。

⁶⁾ 「私小説論」には3種の「私小説」が混在している：①「西洋の浪漫主義文學運動の先端を切るものとして生まれた私小説」(p.120)、②「フランスでも自然主義小説が爛熟期に達した時に、私小説の運動があらはれた。パレスがさうであり、つゞくジイドもブルウストもさうである。」(p.121)、③明治・大正・昭和初期の私小説。

れを巧みに表現しようと苦しんだのでもないのであつて、彼を駆り立てたものは、社會に於ける個人といふものの持つ意味であり、引いては自然に於ける人間の位置に關する熱烈な思想である。大事なのは「懺悔録」が私小説と言へるかどうか（この事は久米氏も既に論じている。）といふ事ではなく、彼の思想はたとへ彼の口から語られなくても、彼の口眞似はしなかつたにせよ、ゲエテにも、セナンクウルにも、コンスタンにも滲み込んでゐたといふ事だ。彼らの私小説の主人公等がどの様に己れの實生活的意義を疑つてゐるにせよ、作者等の頭には個人と自然や社會との確然たる對決が存したのである⁷⁾。

このテキストに対していくつか疑問がわく。「個人と社會との對決」は理解しやすいが、「個人と自然との對決」は必ずしもそうでない。ルソーの思想において、社會（状態）に対して自然（状態）は善きものではなかつたのか。『エミール』における「サヴォワの助任司祭の信仰告白」には「自然に服従しよう。そうすれば、私たちは、自然の支配がいかにか甘美であることか、自然に耳をかたむけたあとで自分が善人であることを証言することがいかにか魅力的であることか、を知るであろう」⁸⁾と記されているではないか。ドイツの『ウエルテル』は別として、なぜフランスの『オーベルマン』と『アドルフ』だけが挙げられ、シャトブリアンの『ルネ』は言及されないのか。そもそも小林がここで述べている「自然」は何をさすのであろうか。

1. 「私小説論」における「自然」の問題

小林は昭和 8 年（1933）10 月、雑誌『文学界』創刊号に「私小説について」という文を發表した。翌年、昭和 9 年（1934）には、雑誌『文藝春秋』1 月号に「文学界の混乱」という一文を載せたが、その後半は「私小説について」という独立した節となっている。さらに次の年の昭和 10 年（1935）にも、雑誌『経済往来』の 5 月号から 8 月号の 4 号にわたって私小説に関する文を連載し、それらはまとめて『私小説論』と題する書物に収録された。以上、足かけ 3 年にわたる著述からは、私小説に対する小林の並々ならぬ問題意識が見て取れる。その一連の私小説論において「自然」はどのような位置づけになっているのであろうか。以下に、それぞれのテキストに現れた「自然」の語と、比較のために「社会」の語の使用頻度を示す表を示す⁹⁾。

	「私小説 について」	「文学界 の混乱」	「私小説 論」1 章	同 2 章	同 3 章	同 4 章
自然	0	0	6	0	0	2
社会	0	2	3	2	6	2

⁷⁾ 小林秀雄「私小説論」、p.122。

⁸⁾ 樋口謹一訳『エミール』『ルソー全集 第七巻』（白水社、1982）、p.53。

⁹⁾ 「自然」ないし「社会」が独立して使用されている場合のみカウントし、「自然主義」「社会化」等に含まれている例は（かなりあるが）除く。

「自然」の語が「私小説論」1章に圧倒的に多いのは、以下に掲げるルソー『告白』冒頭の引用があるからだが、全体として「社会」の語と比較して頻度は少なく、「私小説論」1章に頻出するほかは、4章に2回登場するのみである（後述）。それでは、以下、少々長くなるが「私小説論」の出だしを引用する（「自然」に関連する語・句を線で囲む）。

「私は、嘗て例もなかつたし、将来眞似手もあるまいと思はれることを企圖するのである。一人の人間を、全く**本然**の眞理に於いて、人々に示したい。その人間とは、私である。

たゞ私だけだ。私は自分の心を感じ、人々を知つて來た。私の人となりは私の會つた人々の誰とも似てゐない、いや世のあらゆる人々と異つてゐると敢えて信じようと思ふ。偉くないとしても、少なくとも違つている。**自然**の手で私が叩き込まれた型を、**自然**は毀す方が善かつたか悪かつたか、それは私の本を讀んでから判定すべきことだ。（中略）（原文のママ＝筆者注）數限りない人々の群れを私の周囲に集めてくれ給へ、人々が私の告白をきき、私の下劣さに悲鳴をあげ、私のみじめさに赤面せん事を。彼等が各自、同じ誠意をもつて、**貴方（自然）の帝座**の下に、その心をむき出しにして欲しい。若し勇氣があるなら、たつた一人でも、貴方に言ふ人があつて欲しいものだ、私はあの男よりはましだつた、と」

これは、人も知る通り、ルッソオの「レ・コンフェッション」の書き出しである。これらの言葉の仰々しさはしばらく問ふまい。又、彼がこの前代未聞の仕事で、果して自分の姿を正直に語り得たか、語り得なかつたか、それも大して問題ではない。彼が晩年に至つて、「孤獨な散歩者の夢想」のなかで、嘗て**自然の帝座**に供へた自分をどのやうな場所まで追ひ詰めたかを僕等はよく知つてゐる¹⁰⁾。

このテキストには不思議な記述がいくつかある。まず、「孤獨な散歩者の夢想」のなかで、嘗て自然の帝座に供へた自分をどのやうな場所まで追ひ詰めたか」とあるが、このルソーの遺著において、例えば「第5の散歩」におけるピエンヌ湖畔、サン＝ピエール島での夢想に典型的に見られるように、自然はルソーにとって最後の安らぎの場所ではなかったのか。なにより不思議なのは「自然の帝座」という表現である。「帝座」とは言うまでもなく帝王ないし皇帝が座る玉座であるが、そこに「自然」が座っているというのだ。これは、明らかに「貴方（自然）の帝座」から「貴方」を省き、代わりに「自然」を残したものである。しかし、この「貴方（自然）の帝座」という注釈的訳文には問題がある。それは、小林が『告白』冒頭部を引用する際に中略をしていることに起因している。そこで、やはり引用が長くなるが、確認のために、ルソーの原文掲げる（あとで特に言及する語・句を線で囲み、小林が中略した箇所を網かけする）。

Je forme une entreprise qui n'eut jamais d'exemple, et dont l'exécution n'aura point

¹⁰⁾ 小林秀雄「私小説論」、p.119-120。なお、小林は「ルッソオの「レ・コンフェッション」の書き出し」と書いているが、『告白』の一等最初の「書き出し」は「第1巻」の前に置かれた「第1部」の序文である。

d'imitateur. Je veux montrer à mes semblables un homme dans toute la vérité de la nature; et cet homme, ce sera moi.

Moi seul. Je sens mon cœur et je connois les hommes. Je ne suis fait comme aucun de ceux que j'ai vus; j'ose croire n'être fait comme aucun de ceux qui existent. Si je ne vaux pas mieux, au moins je suis autre. Si la nature a bien ou mal fait de briser le moule dans lequel elle m'a jetté, c'est ce dont on ne peut juger qu'après m'avoir lu.

Que la trompette du jugement dernier sonne quand elle voudra; je viendrai ce livre à la main me présenter devant le souverain juge. Je dirai hautement : voilà ce que j'ai fait, ce que j'ai pensé, ce que je fus. J'ai dit le bien et le mal avec la même franchise. Je n'ai rien tu de mauvais, rien ajouté de bon, et s'il m'est arrivé d'employer quelque ornement indifférent, ce n'a jamais été que pour remplir un vide occasionné par mon défaut de mémoire; j'ai pu supposer vrai ce que je savois avoir pu l'être, jamais ce que je savois être faux. Je me suis montré tel que je fus, méprisable et vil quand je l'ai été, bon, généreux, sublime, quand je l'ai été : j'ai dévoilé mon intérieur tel que tu l'as vu toi-même. Être éternel, rassemble autour de moi l'innombrable foule de mes semblables : qu'ils écoutent mes confessions, qu'ils gémissent de mes indignités, qu'ils rougissent de mes misères. Que chacun d'eux découvre à son tour son cœur aux pieds de ton trône avec la même sincérité; et puis qu'un seul te dise, s'il l'ose : *je fus meilleur que cet homme-là* ¹¹⁾.

小林が「私小説論」を執筆した当時、ルソー『告白』には石川戯庵訳『ルツソオ懺悔録』や生田長江・大杉栄共訳『ルツソオ懺悔録』などの訳があった¹²⁾。小林が「貴方（自然）の帝座の下に」と訳している部分は、既存の訳ではそれぞれ「汝の帝座の下に」「汝の御前に」と適切に訳されている。さらに、引用文全体を既存の訳文と比較・照合すると、小林の引用はオリジナルの訳ということが分かる。それはそれで結構なのだが、小林は中略をする際に、不正確な翻訳をしている。既存の訳における「汝」はもちろん「Etre éternel」(永遠の存在)、つまり神を指す。しかし、小林は中略の直前にあった「自然の手で」や「自然は」という文言に引きずられて、あるいは、もしかして故意に¹³⁾、「汝の」を「自然の」と解している。ともあれ、小林は「私小説論」の冒頭において「自然」へのこだわりを見せている印象を受ける。というのも、「私小説論」連載の前年に彼が発表した「文学界の混乱」中の「私小説について」においては、未だ「自然」の文字は現れず、もっぱら「社会」の

¹¹⁾ Rousseau, *Les Confessions* in *Œuvres complètes*, t.1, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1981, p.5.

¹²⁾ 石川戯庵訳『ルツソオ懺悔録』(大日本図書株式会社、1912)、生田長江・大杉栄共訳『ルツソオ懺悔録』(新潮社、1915)。

¹³⁾ 森本淳夫は「<球体>脱出のもうひとつの道——小林秀雄における象徴主義の克服」において、小林秀雄がジッダのドストエフスキー論を翻訳引用するさい、中略によって「誤読」が生じたことについて述べている。坂巻康司(編)『近代日本とフランス象徴主義』(水声社、2016) p.303-304 参照。

みが言及されるからである（「社会」を線で囲む）。

私小説の先祖は恐らくジャン・ジャック・ルッソオであらう。少なくとも彼は私小説の問題を明瞭に意識して文學に導入入れた最初の人物であつた。「懺悔録」に語られてゐる不幸は英雄の不幸ではない、凡人の不幸である。併し讀者はこの不幸を及び難い不幸と観ずる。言ひかへれば、作者が自分の不幸な實生活を救助したい強い精神力を感じる。この力が私を語つて私以上のものに引きあげる。作者は自傳を書いて文學作品となしてゐるのだ。又言ひかへれば「懺悔録」の客観性は、彼が己れを忌憚なく語るといふ當時前代未聞の企圖を信じた事による。何故信じたか。社會が自分にとって問題ならば、自分といふ男は社會にとって問題である筈だ、と信じられたが爲である。

彼の戦術は簡單明瞭であつた、己れを征服する爲には、己れを出来るだけ正直に語る事。恐らく「懺悔録」の壮大な劇は私小説の問題に就いて思ひ惑つてゐる様な僕達にとっては、ちと簡明すぎるだらう、素朴すぎるだらう。しかし私小説問題の大道は、結局ルッソオに始りルッソオに終わるのではないかも考へられる¹⁴⁾。

ここで、「私小説論」における「自然」の問題に関する先行文献を3つ参照してみる。

まず、齋藤正直は「ルッソオ的自然と私小説的眞実」において、彼なりのルッソ理解を示しつつ、「統一を失ひ分裂を始めた彼（ルッソのこと：筆者注）の孤独な自我が、もはや己れを救済する力をこの在來の神の觀念の中に認めず、かへつてより現實的な自然のなか、社会の裡に己れを健全に統一し、制約する絶對的力を探求して行つた」と述べ、「己れの分裂した自我の苦惱を社會の自然の中に存在する萬人のあるがままの、あつたがままの原人的な共通經驗に徹底的に訴へてやまなかつた」¹⁵⁾とする。齋藤の論考はおおむね難解であるが、なかんずく「社会の自然」という文言は理解に苦しむ表現である。

次に、吉田熙生はまさに「私小説論」における「自然」というタイトルの記事を書いている。実は吉田も小林の訳文の不備を指摘しているのだが、「その理由は不明」¹⁶⁾としている。この問題については後述するとして、吉田は「私小説論」における「自然」の問題に関して、次のように述べている。

（…）「社会化した私」という概念は、「個人と社会」とともに、「自然と人間」という命題も含んでいたのであるまいか。少なくとも小林が「私小説」の特徴を「日常生活」に求め、その「傑作」に「個人の明瞭な顔立ち」が示されているといい、「私の封建的殘滓と社会の封建的殘滓との微妙な一致の上に私小説は爛熟して行つた」と判断する時、そこに

¹⁴⁾ 小林秀雄「文學界の混乱」『小林秀雄全集 第三卷』p.58。

¹⁵⁾ 齋藤正直「ルッソオ的自然と私小説的眞実」『文芸首都』17卷6号（1949）、p.62-63。

¹⁶⁾ 吉田熙生「私小説論」における「自然」『近代文學評論大系 第7卷』（角川書店、1971）「月報6」p.5。

浮かんで来るのは、「社会化」していない「個人」であると同時に、「自然」とも「対決」していない「人間」の姿である。それらは言わば即自存在としての文学であり作家であると言ってよい。

この「自然と人間」という命題は、概念というよりはむしろイメージとして「私小説論」の奥を流れている。というのは、「社会化した私」「個人と社会」という命題のように、一見肯定的な解釈が可能な形では表現されていないからである。しかし、だからと言って軽視してよいものとも思われない¹⁷⁾。

吉田の言う「言わば即自存在としての文学であり作家である」を筆者なりに敷衍すると、日本の私小説作家は、この国の多神教的自然風土の中、自然と一体化した生活の中で、必ずしも「対自存在」として、つまり十分意識的には、自然ないし世界と対峙してこなかった。いっぽう、西洋の「つづいて現れた自然主義小説家達はみな、かういふ（社会や自然との＝筆者注）対決に関して思想上の訓練を経た人達だ¹⁸⁾。」小林はそのような日本の私小説作家の、いわば無思想な態度を批判するために、西洋人の自然との関わりを引き合いに出したのである、ということではないだろうか。

いっぽう、「私小説論」4章における「自然」へ言及するくだりは以下のとおりである。

藝術は自然を模倣するといふことを信条とした自然主義作家達は、表現技法についての様な苦心をしたにしろ、何はともあれ、自然といふ明瞭な題材は信じられたのだから、その苦心そのものは、公表するに足りないものであつた。わが國の私小説家達が、所謂心境小説といふもので、その私生活の細かい陰翳を明るみに出さう、讀者の前で私生活の秘密を上演しようとするに際しても、自分の生活と社會生活との矛盾を感じず、感受性と表現との間に本質的な軋轢を感じてみない以上、取り扱う題材そのものに関しては疑念の起り様がない¹⁹⁾。

ここで述べられている「自然」とは日本の自然主義作家たちが描くところの自らの私生活を含めた「自然な」生きざまであつて、1章で述べられた、西洋の自然主義作家たちが思想的に対決した（と小林が言う）自然とは異なる。吉田は「「私小説論」における二つの「自然」を概念的論理的にどのように弁別すればよいのか²⁰⁾」と自問している。筆者には小林における用語の混用と見えるが、いかがであろうか²¹⁾。

¹⁷⁾ 吉田前掲論文、p.5-6。

¹⁸⁾ 小林秀雄「私小説論」、p.122。

¹⁹⁾ 小林秀雄「私小説論」、p.139-140。

²⁰⁾ 吉田前掲論文、p.6。

²¹⁾ 小林は昭和15年（1940）に書いた「文学と自分」において次のように述べている。「(…) 文學者の覺悟とは、自分を支へているものは、まさしく自然であり、或は歴史とか傳統とか呼ぶ第二の自然であつて、

最後に、伊中悦子は「小林秀雄「私小説論」—〈社会化した「私」の可能性〉—において、「社会や実証主義的自然との対決なしに、自己の独創性を信じ、自己一人の人生の特殊性を頼んで、告白の純化に文学の純粋性を賭けた日本の私小説²²⁾」と述べている。「自然との対決」を「実証主義的自然との対決」と解釈しているのは妥当であろうが、しかし、それは、さきほど注18で引用したように、西洋の自然主義小説家たちによる、思想的な自然との対立であって、ルソー（の思想）における「自然との対決」ではない。

そこで、ルソー『告白』冒頭部の引用、及びそれに続く小林秀雄の文に立ち返って、いまいちどテキストを読み直してみよう。小林は、昭和9年の「私小説について」においては「ルッソの『懺悔録』」と書いていたが、昭和10年の「私小説論」ではわざわざ「ルッソの『レ・コンフェッション』」と表記しており、フランス語原文へのこだわりを見せていることを感じさせる。そのような中で、「自然」という訳語に対応するフランス語の単語«nature»を小林はどのようにとらえていたのだろうか。まず、「dans toute la vérité de la nature」は「全く本然の眞理において」と訳されている。石川戯庵訳では「自然の眞をその儘の」、生田長江・大杉栄訳では「人間ひとり素裸にして」となっており、ここでも小林訳がオリジナルであることが明らかである。ここで«nature»は人間の「本性」「性質」を表わすと思われるので「本然」は妥当な訳といえよう²³⁾。ルソー（思想）において人間の本性は善いものと考えられていたこともここで思い起こされる。次に、「Si la nature a bien ou mal fait de briser le moule dans lequel elle m'a jetté」は「自然の手で私が叩き込まれた型を、自然は毀す方が善かったか悪かったか」と訳されている。この万物の内在的原因としての神である「自然」から、さらに、創造主としての神である「永遠の存在」へと、

自然を宰領するとみえるどの様な観念でも思想でもないといふ徹底した自覺に他ならぬ事がお解りだろうと思ふ。これは一方から言へば自然や歴史を心を虚しくして受容する覺悟とも言へるのである。前に藝術家は、作品の裡に己れを見付けだして申しましたが、作品とは自然の模倣を斷じて出る事は出来ないのであつて、作品とは藝術家が心を虚しくして自然を受け納れるその受け納れ方の極印であると言ふ事が出来る。だから、若し藝術家に己れといふ様なものとすれば、この極印のなかにしかないと思ふのであります。』（『小林秀雄全集 第七巻』（新潮社、1968）、p.153-154）。これは、小林が5年前、昭和10年の「私小説論」において文学者の「社会」や「自然」との「確然たる対決」に注目していたことと真っ向から対立することにはならないだろうか。

²²⁾ 伊中悦子「小林秀雄「私小説論」—〈社会化した「私」の可能性〉—『日本近代文学』27巻（1980）、p.200。

²³⁾ 比較的近年の訳では、桑原武夫訳は「自然のままの眞実において」（『告白 上』岩波文庫、1965、p.10）、小林善彦訳は「自然の眞実のままに」（『告白』『ルソー全集 第一巻』（白水社、1979、p.13）と、直訳風になっている。だが、「le bleu du ciel」が「空の青」のみならず「青い空」と訳すことが可能であるように、「眞（まこと）の性格において」「ありのままの性質で」と意識することも可能であろう。なお、セナンクールには『人間の原初的性質に関する夢想』*Réveries sur la nature primitive de l'homme* という著作がある（初版1799年）。『オーベルマン』にも人間の性質に関する記述があるいっぽう、アルプスやフォンテーヌブローの森などの自然を前にした感慨も述べられる。それらはある意味で人間の/と«nature»との対決、と言えるのかもしれない。

ルソーのテキストでは続いてゆくのだが、小林は中略によってその流れを断ち、もっぱら「自然」を擬人化して、擬人化された「自然」を「貴方」すなわち神の玉座に就けるのだ。次に、ルソーの引用に続く小林の文「彼を驅り立てたものは、社會における個人といふものの持つ意味であり、引いては自然に於ける人間の位置に關する熱烈な思想である」における「自然」とは、(神によって生み出された)世界そのものであると思われる。それは、小林の「引いては」という文言が、「自然」が「社会」をさらに拡大したものであるというイメージを与えることからうかがえる。小林は、日本の読者には馴染みにくく、また自身認めていなかったと思われる「jugement dernier」「最後の審判」とか、「souverain juge」「至高の審判者」、そして「Etre éternel」「永遠の存在」といった語句の訳出を忌避し、「神」を名指しすることはせず、その至高の存在によって生み出された世界としての「自然」のみを持ち出したのではないだろうか²⁴⁾。

ところが、「私小説論」1章末尾近くでは、「社會との烈しい對決なしで事をすませた文學者の、自足した藤村の「破戒」に於ける革命も、秋聲の「あらくれ」における爛熟も、主觀的にはどの様なものだったにせよ、技法上の爛熟であつたと形容するのが正しいのだ²⁵⁾。」とあり、「自然との対立」が忘れられている。この事実からも、「私小説論」における「自然」の問題は、小林が苦心して(?)訳出し引用した『告白』冒頭部の強い影響下に現出していると考えられるのである。

2. 小林秀雄とセナンクール、『オーベルマン』

次に、小林秀雄の「私小説論」の冒頭部で名前の挙がった西洋の文學者およびその作品、特にセナンクールと『オーベルマン』について見てゆくことにする。

まず、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』についてであるが、最初に述べたように、これはルソー『告白』の刊行前に出版されているというアナクロニズムはある。しかし、この小説は後世に大きな影響を与え、19世紀初頭のいわゆる世紀病の淵源のひとつとなっているし、その形式および内容は他の2作品と大きな類似性を呈している。まず形式については、『ウェルテル』と『オーベルマン』は書簡体小説であり、『アドルフ』は書簡体ではないが、いわば「手記体」の小説となっている。当時、書簡体小説の流行が最盛期に達しており、その形式を採用したということもあるが、手紙の書き手、すなわち物語の語り手が、己の心情を吐露する、という意味においてはルソーの『告白』の系譜に連なると言ってよい。次に、内容に関しては、『ウェルテル』は婚約者のいる女性シャルロッテへの愛、『アドルフ』は貴族の愛人となっている女性エレノールとの関係を語っているのに対して、『オーベルマン』はもっぱら孤独な青年の思考と行動をつづっているように理解されてい

²⁴⁾ 清水孝純は、「小林秀雄とドストエフスキー」において、「(…)氏(小林のこと=筆者注)にとって神は、現実それ自体なのだ。この点、氏の精神にも、争い難く汎神論的日本人氣質がよみとれるのだ」と述べている。『小林秀雄とフランス象徴主義』(審美社、1980) p.73。

²⁵⁾ 小林秀雄「私小説論」、p.125。

る。しかし、実は、かつて思慕を寄せていたものの、別の男性のもとに嫁いで、今はデルマール夫人となっている女性への秘められた愛が語られているのである。以上 3 人のヒロイン、シャルロット、エレノール、デルマール夫人には、それぞれシャルロット、スタール夫人、ヴァルクナール夫人、というモデルが存在し、彼女らとの関係に、作者ゲーテ、コンスタン、セナンクールが苦悩していた、ということも共通点として挙げることができるだろう。ところで、小林が「私小説論」で言及しなかったシャトーブリアンの『ルネ』については、ルネのスーエル神父への文字通り「告白」という体裁を取っているという意味では、ルソーの『告白』に一番近いかもしれない。ただし、その告白の最後に出てくる、妹アメリーの禁じられた愛、というテーマにおいて他の 3 作とは異質であるけれども²⁶⁾。

ところで、小林秀雄も、自身、創作をしている。「ひとつの脳髓」「ポンキンと女」「おふえりあ遺文」「X への手紙」等がそうだ。これらの作品のうち、「X への手紙」は小林の最初の私小説論である「私小説について」が出た前年、昭和 7 年（1932）に発表されている。時期的に近く、また内容的にも私小説と関連していると思われるので特に見ることにしたい²⁷⁾。さて、「X への手紙」は、タイトルからわかるように、X とされる人に宛てて書き送った手紙、という体裁を取っており、当時としては比較的珍しい書簡体小説といえる。内容は、「俺」と自称する語り手がおのれの思考をつづるものである。その意味では『オーベルマン』において「je」がもっぱら自分の言動について語るのと軌を一にしている。また、『オーベルマン』同様、テーマは多岐にわたるが、その中で、愛についても語る一節もある。

俺は今までに自殺をはかった経験が二度ある、一度は退屈の爲に、一度は女の爲に。

突然だが俺はあの女とは別れた。結局はじめから惚れてなんぞみなかったのだ、と俺も人並みに言ってみたいものだと思う。

俺は君に自分と女とのいきさつを報告する気はない。俺は戀愛小説を書く才能を持つてはゐないし、それに自分のしでかした事件の顛末を克明に再現しようといふ、或る種の人々の持つてゐる奇妙な本能を持つてゐない²⁸⁾。

ここに語られている「女」とは、小林秀雄の友人・中原中也とかつて内縁関係にあった長谷川泰子を指すとされている。しかし語られる内容は漠然としている。「俺」は「自分のしでかした事件の顛末を克明に再現しようという、或る種の人々の持つてゐる奇妙な本能

²⁶⁾ 『ルネ』がもともとシャトーブリアン『キリスト教精髄』（1802）第 2 部・第 3 卷・第 9 章「情熱のあてどなさ」を例証するための挿話であった、という意味においても異質である。

²⁷⁾ 大岡昇平はこの作品を「思想家の私小説」と呼んでいる。『小林秀雄全集 第二巻』（創元社、1950）「解説」、p.310。

²⁸⁾ 小林秀雄「X への手紙」『小林秀雄全集 第二巻』（新潮社、1968）、p.86、p.87。

を持つてゐない」と述べるが、この「或る種の人々」とは、日本の私小説作家、例えば姪とのいきさつを自ら暴露し、小説『新生』（1918年）に書き記した島崎藤村などが念頭にあるものと思われる。それに対して小林は「自分と女とのいきさつを報告する気はない」と述べている。ところが、しかし、やはり女のことを語らずにはおれないのだ。一方、セナンクール『オーベルマン』においても、非常に抑制した書かれ方ではあるが、語り手は彼が想う女性のことをつづる。

わたしは金輪際あの人に会うまいと心から確言できたはずでした。それははっきり決意していたことでした、それなのに(…)彼女への想いは、さまざまなことがらの中にあって、わたしという存在と時間において感じられる感情に結ばれていたのです²⁹⁾。

「X への手紙」の「俺」は女のために、そして退屈のために自殺を考えたことがあると書いていたが、『オーベルマン』においても、第 41 信において自殺の問題がクローズアップされる。オーベルマンは「退屈」とは書いていないが、己の空虚な人生の価値を問い、自殺の可能性について想いを巡らすのだ。その背後には、愛する女性と結ばれなかった悲しみが見え隠れする³⁰⁾。

もう一つだけ、『オーベルマン』と「X への手紙」を比較しておきたい。それは、自分と手紙を宛てた相手との関係性についてである。

あなたにしか話せないこと、他には誰にも言いたくないこと、また他の人なら聞きたいとも思わないようなことをあなたに語るのがわたしの唯一の喜びです。わたしの手紙の内容なぞ何だってよいのです³¹⁾。

俺に入用なつつた一人の友、それが仮りに君だとするなら、俺の語りたいたつつた一つの事とはもう何事であらうと大した意味はない様である。さうではないか。君は俺の結論をわかってくれると信ずる。語らうとする何物も持たぬ時でも、聞いてくれる友はなければならぬ。俺の理解した限り、人間といふものはさういふ具合の出来なのだ³²⁾。

さて、小林は昭和 14 年（1939 年）、フランスの文芸批評家サント＝ブーヴの遺稿集『我が毒』の翻訳を出すが、この翻訳作業について、鹿島茂は興味深い仮説を提出している。

²⁹⁾ Senancour, *Oberman*, Lettre XL, GF Flammarion, 2003, p. 78-17 (筆者訳)。なお(…)は筆者による略。以下同様。

³⁰⁾ 萩原直幸「岩波文庫の検閲と『オーベルマン』の削除をめぐる」(日本フランス語フランス文学会中国・四国支部支部編『フランス文学』No.30 (2015)、p.33-34 参照)。

³¹⁾ Senancour, *Oberman*, Lettre XXXVII, p.165. (筆者訳)

³²⁾ 小林秀雄「X への手紙」、P.82。

(…) 小林秀雄が中原の死を契機に「人生の謎とは一体何であらうか。それは次第に難しいものになる。齢をとればとる程複雑なものと感じられて来る」というサント＝ブーヴの言葉を自分自身の述懐と感じ、『我が毒』の翻訳を思い立った裏には、サント＝ブーヴに対するいかなる共感(ないしは同じ運命の者に対する共犯者意識)が働いていたのだろうか？

日本の小林秀雄研究者はあまり気づいていないようだが、それは十九世紀のフランス文学を少しでも囁ったものには至極自明なものである。中原に対する小林の関係は、ユゴーに対するサント＝ブーヴのそれと相似的であるということだ³³⁾。

サント＝ブーヴは生前、自分について、自作について、批評について、人生について、恋愛と婦人(小林の訳語＝筆者註)について、同時代のユゴーやラマルチヌ、ミュッセ、バルザック、サンド、メリメ、等々について、感想や断章を書き溜めていたが、死後それらがまとめられて、*Mes poisons* というタイトルで発表された(1926)。彼の同時代人評は辛辣で、特にユゴーなどに対しては歯に衣を着せずに批判している。サント＝ブーヴは詩人として出発し、詩集『慰め』や『ジョゼフ・ドロルムの生涯と意見』を発表するが、あまり注目されなかった。同世代の詩人ユゴーの文学的才能と成功に圧倒され、自らはやがて批評家に転じる。その間、サント＝ブーヴはユゴーの妻アデルと関係を持つに至る。一方、小林秀雄は、詩人・中原中也の才能を羨みつつ、その愛人の泰子を奪ったというのだ。

ところで、サント＝ブーヴは『我が毒』の中で、シャトーブリアンに対しても皮肉っぽく語る。そのシャトーブリアンが文学者としても政治家としても成功をおさめたのに対して³⁴⁾、同世代のセナンクールは不遇であった。そのセナンクールをサント＝ブーヴは評価する。鹿島茂的に言えば、シャトーブリアンに対するセナンクールの関係は、ユゴーに対するサント＝ブーヴのそれと相似的である、ということになるだろうか。サント＝ブーヴはセナンクールに関するエッセーを書き、それが『オーベルマン』改訂版(第2版)(1833年)の冒頭に序文代わりに掲載される。それを機に、『オーベルマン』が脚光を浴びることになり、セナンクール再評価に貢献することになるのである。

むすびにかえて

小林秀雄は帝大仏文科の恩師・辰野隆の講義を受け、その警咳に接して、ある程度セナンクールや『オーベルマン』について聞き知っていたと思われる。二年上級の市原豊太は以

³³⁾ 鹿島 茂『ドーダの個人小林秀雄 わからなさの理由を求めて』(朝日新聞出版、2016)、p.56。

³⁴⁾ シャトーブリアンは1801年にナポレオンがローマ教皇ピウス7世とコンコルダ(政教協約)を結んだ翌年にタイミングよく『キリスト教精髓』を出版した。それに対して、後年、セナンクールは批判的なパンフレットを書くことになる。Senancour, *Observations critiques sur l'ouvrage intitulé « Génie du christianisme », suivies de quelques réflexions sur les écrits de M. de Bonald*, Delaunay, 1816.

下のように追憶している。

(…) 講義は「十九世紀フランス文藝思潮」であつた(…) 辰野先生の講義は割に小ぢんまりした教室で行はれた(…) 學生は今と違って少なく(…) 我々が三年になつた時に入學した組には、小林秀雄(…) の諸君がゐた。数が少いから、皆まもなく昵懇になつた。三年から一年まで同じ講義を聴くのである。(…) 辰野先生は殊のほかこの文學者(セナンクール=筆者注)を愛してをられた³⁵⁾。

いっぽう、小林は以下のように回想している。

教室には時々出た。僕は翻譯と家庭教師で自活してみたし、その上戀人を食はせる必要もあつたし、無暗に出席などする暇はなかつたのである。大學は人生の一部に過ぎぬ、という様な意見を別に抱いてみたわけではないが、自然さういふ生活を強ひられてみた³⁶⁾。

辰野教授の指導のもと、東京帝国大学仏蘭西文学科編集による『仏蘭西文学研究』の第1輯(1926年)には小林の「人生斫断家アルチュル・ランボオ」が掲載された。第4輯(1928年)には市原の「オーベルマン」が掲載されている。小林はそれに目を通したであろうか。ともあれ、小林がどの程度『オーベルマン』に目を通していたかは確認できない³⁷⁾。むしろ、ランボーやヴァレリー、アラン、ドストエフスキー等と違って、小林秀雄とセナンクールには一見、必然的関連性はないように見える。しかしながら、サント=プーヴという「補助線」を引くことにより、両者の間には一筋の糸が見えてくるように思われるのである³⁸⁾。

³⁵⁾ 市原豊太「辰野隆先生」『内的風景派』(文藝春秋、1972)、p.212。

³⁶⁾ 小林秀雄「僕の大学時代」『小林秀雄全集 第三巻』(新潮社、1968)、p.350。

³⁷⁾ 「辰野先生の書庫が僕の借出し自在の図書館であつた。僕はこの図書館の本の頁を勝手に切り、丸をつけたり棒を引いたりしてゐた。そして返す時には、各頁毎に髪の毛と煙草の灰を入れて置くのを忘れなかつた。(辰野先生曰く、フケも、というのを忘れるな。)」小林「僕の大学時代」、p.352。「やがて原書(Obermannのこと=筆者注)を読みたいと思つたが、絶版らしくいくら註文しても来なかつたので先生(辰野教授のこと=筆者注)に長らく拝借したこともある。」市原豊太訳「オーベルマン 上」(岩波文庫、1940)「解説」p.15-16。

³⁸⁾ 辰野隆は「先駆セナンクール」『仏蘭西文学(下)』(白水社、1950)においてセナンクールとボードレールの親近性や虚無の問題について述べている。小林秀雄とボードレールの関係を考え合わせると、別の「糸」が見えてきそうだが、また別の機会に譲りたい。